



マインドセットを変える

新潟県小学校長会 制度部長

新井 智 普

「日本チームが勝つためには、マインドセットの変化が必要」。エディ・ジョーンズ前ラグビー日本代表ヘッドコーチの言葉が耳に残った。マインドセットとは、習慣化した考え方や思考態度、または傾向といった意味で使われる。これまでも、日本独自のマインドセットについて、厳しい指摘を聞いたことがある。例えば、「分からないことがあったら、まず自分で調べてから聞く」「考えはまとめてから話す」といった日本独自の考え方だ。こうした考え方はグローバルの世界では通用しない。「分からないことがあったら、その場でやめて聞く」「相手と一緒に考えて考えをまとめる」というのが世界標準の考え方だ。

伝統を重んじる「日本式の指導」を否定するつもりはない。しかし、グローバルな視点から指導の在り方を見つ

め直し、時代に対応したマインドセットに変えることも重要だ。なぜなら、今通用している指導方法を一年後にそのまま試しても、うまくいく確証はないからだ。社会が変わり続ける限り、マインドセットは変化する。また、どこかに正しい指導方法があると考えるのも、社会を固定化したものとしかれない狭いとらえ方だ。

「教育は予想ではなく、創造である」と言う人がいる。マインドセットの変化を起こすには、自らの指導を振り返り、実態に即したものに換えようとする創造的な教師の存在が不可欠となる。そして、こうした営みの連続があって可能になる。止まることなく続く教師の創造的な営みを校長は適切に評価し、人材育成に向けた組織的・計画的な経営を進めなければならない。

大会の概要

全連小・山口大会報告

第六十七回全国連合小学校長会研究協議会山口大会が、十月二十二日・二十三日の両日、「西の京」山口市にて開催された。

本大会は、第六十五回三重大会から引き継がれている大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の理念をさらに推し進めることを目指し、副主題「志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」が設定された。大会主題の理念をさらに深化・充実・発展させることをねらった。

大会一日目午前の文部科学省大臣官房審議官伯井美徳氏から、「高校と大学の接続改革の動向」「学習指導要領改訂の方向性」「道徳の教科化」「全国学力・学習状況調査からの示唆」等、資料を基に説明が行われた。高校生の読書量・学習時間が十分でないこと、アクティブラーニングの視点からの授業改善の必要性、五・六年生の英語授業等の話が印象深く、二〇二〇年の新学習指導要領完全実施に向け、今後話具体的になっていくとのことである。午後は、五領域十三分科会に分かれて研究協議が行われた。各分科会ではこれまでの大会の成果と課題を確認し、

それらに立脚して進化・発展型の成果を求める協議がなされた。なお、今回の分科会発表資料は事前にダウンロードできるようにしており、分科会の充実に向けた意気込みが感じられた。

大会二日目の全体会では、研究協議のまとめが示され、校長の役割として職員・保護者・地域住民等に明確なビジョンを示すこと、多種多様な連携をコーディネートすること、種々の取組の「動き出し」を作ること等の重要性が確認された。その後、八項目の決意が大会宣言として提示された。

シンポジウムは、福田靖氏(脚本家)、山根基世氏(アナウンサー)、橋本東光氏(ジオパワーシステム会長)の三名をシンポジストに迎え、コンセプト「志 未来創造 和をつなぐ」に沿った対談が行われた。各氏の仕事との出会いや志、ヒト・モノ・コトとの結び付き、未来への夢や希望について、これまでの経験を通して培われた持論を拝聴することができ、とても有意義であった。

最後に閉会式で、第六十八回全連小研究協議会が高知市で開催されること確認され、本大会が終了した。



特別寄稿

生かされているからこそ

「命」の大切さを伝える

共立観光(株) 六日町支店長

越後愛届け隊 隊長

倉田 智浩



当たり前の生活に毎日「ありがとう」と言葉で感謝を伝えます。(三年生)

おいしいごはんを食べられることも、机で勉強できることも、家族と過ごせることも全部幸せなんだということを実感しました。(四年生)

生きるということは大変なこと。でも辛くなって命を無駄にしたら、大震災で死にたくなくても死んでしまった人達に申し訳ない。だから今ある命を大切にしたいです。(五年生)

自分にはあまり関係のないことだと思っていました。しかし最近、親に暴言を吐いたり、友達に八つ当たりをしてしまうことがあります。まわりに家族や友達がいてくれることに感謝して、今後気を付けたいです。(六年生)

今、越後愛届け隊の活動の一つにしている「命の大切さ」を伝える講演会終了後に書いてくれた子どもたちの感想文の一部です。東北大地震の復興活動で知り合った、家族五人全員を亡くし一人ぼっちになってしまった当時小

学六年生の女の子から学んだ「感謝・絆・命」の大切さを、この講演会で子どもたちに伝えていきます。

簡単に人の命や自分の命を傷つけてしまう、動物や物を粗末にしてしまう世の中。この講演で少しでも東北のこどや自分や他人のことを想う「ココロ」が育まれればきっと素敵な世の中になると信じてこの活動を続けていきます。

現在、県内の小・中学校二十三校、三千人以上の子どもたちの前で講演をさせていたいております。

平成二十三年三月十一日以降、何かしたいという気持ちと個人的な使命感の中、ボランティア隊を結成しました。隊名は「越後愛届け隊」。私たちの愛を少しでも多くの被災者へ届け、その癒えない痛みを共有し、共に復興していきたいという気持ちを込めて名付けました。いつもの観光旅行とは違い、最初は試行錯誤の毎日でした。道路はどこまで通行可能なのか、現場では飲食物の調達は可能なのかなど、不安は尽きませんでした。一つ一つ不安をクリア

しながら、震災から四か月後の七月九日三十名の同志と共に宮城県石巻市で第一弾を実施いたしました。

現場は石巻港からすぐの南浜地区。猛暑の中、ひたすら集合住宅でのガレキ撤去中心の作業でした。津波で泥だらけになった家具や家電、散乱している生活用品、子どもの遊具や衣料品、ここに住んでいた家族の三月十一日の時間が残っていました。家族はどんな思いであの時間を迎え、このアパートを後にしたのか。四か月経ったその時でさえ、取りに来ていない玄関先に積まれたアルバムや想い出の品の泥を一つずつ落としながら、祈るような気持ちでこの家族の無事を願いました。活動途中、被災されたおばあちゃんが、当時の状況を話してくださいました。

津波に流されながら、手に当たった何かを必死につかみ、九死に一生を得たこと、目の前で、流されてきた家と家に挟まり亡くなってしまったお隣さんのこと、想像を絶する当時の状況に言葉が失いました。お話の最後に何かしてほしいことはありますかとお聞きしましたら、「被災地のことをい

つまでも忘れないでほしい」と涙を浮かべ、私の手を握り、訴えかけるようにおっしゃっていました。痛いほど強く握ったそのおばあちゃんの手から伝わった感情は今でも忘れません。それから四年。ツアーも二十三回、延べ六百十二名の同志と共に被災地での活動を続けてきました。一度きりのつもりだったこの活動が、四年間継続できたのは、おばあちゃんその一言が大きなきっかけになっています。

今、自分は何不自由なく生きています。何も無くなってしまった被災地を訪れる度に、いつもこのことの意味を考えさせられます。すべての答えは出ていませんが、一つだけ気付いたことがあります。それは今、自分は「生きている」のではなく、「生かされているのではないか」ということです。

活動で訪れた現場には、悲惨な現状とそれを取り巻く環境がたくさん存在します。その中でも、復興に向けて、がむしゃらに生きようとしている被災者の生の声を一人でも多くの方に伝えていくことが、生かされた私たちの使命だと感じました。震災前までは、まったくボランティアに興味がなかった私でしたが、もうボランティアが生活の一部になりました。この活動は続けます。待っていてくれる大勢の被災地の方が笑顔で「もう大丈夫だよ」って言う日まで。





自然豊かな山間の地、 かつて福島県だった県境の地ならではの

佐渡島に匹敵する面積を有し、その多くが森林に覆われた自然豊かな東蒲原郡は、明治十九年まで七百年もの間、会津に属していました。故に、地理や歴史、暮らしや文化などに越後と会津双方の影響が色濃く残る地域です。

峡谷をぬける大動脈

つい先日、紅葉も盛りの十一月に阿賀野川をカヌーで下りました。この夏に、郡校長会チームがレガッタ大会に挑戦した様子がテレビで放映された津川漕艇場から、深い谷間を行く旧国道四十九号線に沿った約五キロメートルの間です。ちょうど通りかかったSLばんえつ物語号の白い煙が、紅葉の山肌消えていくのを眺めながら漕ぎ進みました。

江戸時代には、会津側と越後側を結ぶ水運の大動脈であった阿賀野川は、近代化の進む中でも役割を変えながら時代の変遷にかかわってきました。明治の草倉銅山、電力の大供給源となった豊実ダムや鹿瀬ダムなどです。

大牧の赤い鳥居を右にやり過、し本尊岩が近づいてくると、左手に昭和橋の橋脚が見えてきました。中学生の頃、この橋を渡って左岸の沢筋に、石灰岩中のフズリナの観察に行ったのを思い

出しました。周辺の石灰岩は、鹿瀬地区の昭和電工に運ばれ、昭和期の地域の隆盛に寄与していたのです。

体験した何度かの川下りを合わせる。と日出谷付近から咲花までの風景を全て川面から眺めたことになりました。峡谷を下る阿賀野川の素晴らしさを「廃墟なきライン川」と賞賛した、明治初期の旅行家イザベラ・バードの気分を今でも味わうことができました。

峰の窓を越えた人々

山間地の東蒲原郡には、数多くの峠があります。その内の一つ諏訪峠を越える殿様街道を久しぶりに歩いてみました。江戸時代の新発田・村上両藩の殿様が参勤交代の際に通った道です。

十返舎一九、山県有朋なども越えました。冬に難儀をして通り、「雪深く路険し」といった内容を記した吉田松陰の石碑が建つ諏訪峠から三川地区行地の一里塚まで降り、津川地区柳新田の一



行地の一里塚

里塚まで登り返す行程です。それぞれに残る二個一対の小山ほどの一里塚は、完全な形で保存され貴重な史跡となっています。

所々に残る当時のままの石畳をたどり、黄葉したブナの樹間から白く輝く飯豊連峰の眺めを楽しみました。早春に歩いた時にはカタクリやギフチョウが、初夏にはオオルリのつがいが間近に飛び交い、茶屋跡付近からは赤い花の咲く高木が見えました。峠を行き交った昔の人々の疲れを癒した景色が、今も残ることを嬉しく思いました。一里塚の間を万歩計で計ってみると約六千百歩で、一步約六十五センチメートルとして四キロメートル程になります。江戸までの街道を歩き通すとはたして何歩になるでしょうか。

時代をつなぐ道をいつまでも

阿賀野川周辺には、「会津裏街道」と言われる道もあります。私の実家のある鹿瀬地区豊実の馬取という集落から西会津町奥川杉山集落に抜ける檜木峠には、「上様御小休所」の石碑が残っています。よく踏まれた山道なのですが、この春訪れた時には泥浴いの路肩が崩れている所もありました。地元の人たちが毎年行ってきた整備作業が、高齢化で行き届かなくなったようです。

阿賀野川の支流、実川上流の実川集落から会津方面に抜ける街道には、飯豊連峰の最高峰・大日岳が指呼の間に迫る万治峠があります。実川集落には、

山村農家として国の重要文化財に指定されている五十嵐家住宅があり、画家の小川芋銭や文部大臣を務めた安倍能成など多くの文人墨客が滞在しました。ゆかりの書や絵画を見せていただく研修の機会がありました。山深い地にあっても高い文化の香りがしました。

上川地区から福島県への峠もいくつかあります。今年五月に歩いた、サンカヨウの清楚な白い花が盛りだった大倉峠は、隣の九才坂峠と共に上川地区と西会津町安座を結ぶ主要生活道路として、昭和二十年代まで多くの人々が往来していました。九才坂は、弘法大師が九歳の時に越えたとの伝承がある、樹林の中をつづら折りに登る落ち着いたたたずまいの山道です。

また、常浪川上流の千メートルを超える地点にある塩の倉峠には、最近新潟側が完全舗装された峰越林道を使って、昨年の秋に久しぶりに行きました。峠の西側には、保護運動によって伐採を免れた三百ヘクタールを超えるブナの巨木の森が黄金色に広がっていました。

これらの東蒲原郡の宝を知れば知るほど、未永く残したい素晴らしい財産だと強く思います。

(参考文献「阿賀町ものしりガイドブック」新潟日報事業社)

郡市だより

長岡市も出雲崎町も「故郷はひとつ」

長岡市三島郡小学校長会

平成十七年四月に近隣五町村と合併、その後さらに五市町村を加え、今年合併十周年を迎えた長岡市。良寛の出生地、北前船で栄えた出雲崎町。長岡市三島郡小学校長会は、長岡市五十九名、出雲崎町一名に総合支援学校と附属長岡小学校の二名がオブザーバー参加し、計六十二名で活動している。

長岡市教育センター、馬高縄文館、県立歴史博物館、県立近代美術館などを会場に、年間七回の校長会、五回の研修会、二回の懇親会と様々な活動を展開している。

一 連携を密に図る

定例の校長会は、会員間の連絡提携に関する事、学校運営上必要な事項の調査研究・打合せに関する事、教育関係諸団体との連絡提携に関する事など、幅広い分野に渡って協議を深めている。

二 多彩な研修・交流に取り組む

研修会は、特別支援教育や人権教育、同和教育などの各種教育課題に関する研修の他、県立歴史博物館や県立近代美術館の常設展や特別展の鑑賞といった、地域にある教育施設を活用した研修にも取り組んでいる。また、福利部

の主催で退職後の生活向上について先輩から学んだり、学習指導改善調査協力からの報告を基に、自校の授業改善に生かしたりしている。

二回の懇親会は、七月と三月に実施している。六十二名という大勢の会員がおり、日常的な交流がなかなか図れないため、懇親会が貴重な情報交換の場となっている。

三 故郷はひとつ

九月十六日、長岡市三島郡の小学校六年生二千五百名以上が勢揃いして親善陸上大会が実施された。そこで長岡の子どもたちと出雲崎の子どもたちが、心を合わせて歌ったのが「故郷はひとつ」である。阿木燿子さん作詞、宇崎竜童さん作曲の歌だ。小体連の熱い思いがあつて、今年からこの歌に変わった。故郷長岡、故郷出雲崎を愛する子どもたちの育成を目指し、長岡市三島郡小学校長会はこれからも力強く歩み続ける。



今年度の児童数は全校で九名、複式三学級です。ここ数年は児童数が少ない状況でしたが、極小規模校であっても児童一人一人を十分に伸ばす教育活動を展開しています。特に、地域とともに子どもを育てる教育活動に力を注いでいます。地域の人材活用を七年前から積極的に進めてきました。教育活動支援組織「上小応援団」が結成されて、現在に至っています。登録者は二十三名おり、主に地域学習への協力や支援をいただいています。

ここでは、地域の象徴である焼山を生かした五・六年生の総合的な学習の時間について紹介します。「火山災害を知ろう」「焼山の防災を知ろう、考えよう」をテーマに学習を進めました。

学校紹介

地域とともに子どもを育てる学校

糸魚川市立上早川小学校



早津先生のお話

外部講師の理学博士早津賢二先生に解説していただいたり、昭和四十九年の噴火による災害を地元に残る資料で説明してもらったりしました。



公民館での調べ学習

さらには、これまでの火山災害から防災のための施設や対策等について、地域に出かけて調査しました。現地学習として、気

象庁の火山観測所と火打山川第一砂防ダムへ出向きました。いずれの活動も、上小応援団の方々あってこそその活動でした。多くの教育活動が、地域の皆様の支えがあつて成り立っています。正に、地域とともに子どもを育てる学校です。当校は、本年度をもって閉校となります。今後、焼山ジオサイトをどのようになかしていかかが課題となりました。